

薬物克服 通所者をミカン農園派遣

ダルク(DARC)
1985年に民間初の薬物依存症回復施設として東京都に東京ダルクが設立された。現在は42都道府県の54施設に広がり、計450人が利用。通所と入寮があり、薬物に手を出した体験などを聞き合うミーティングなどのリハビリプログラムで回復を目指している。

社会復帰に向け、ミカン農園で汗を流す人々。三重県尾鷲市で



○法人・三重ダルク（津市）が一年前から、三重県内のミカン農園に依存症の通所者を派遣し、収入を得ることで自立を促す活動を続けている。全国初の試みで、生活保護を受けていた女性が自活するなど成果を上げつつある。農園側も貴重な働き手と受け止めており、三重ダルクは「社会復帰の新たなモデルに」と意気込む。

社会復帰の道実りを

三重ダルク

の「平山農園」から依頼が入ると、通所者は借家で共同生活しながら畑仕事とリハビリに励む。十一月の早朝、山の斜面のミカン畑で作業が始まった。この日はサルやシカよけの柵の補強作業が。暮れまで続いた。

「平山農園」から依頼が入ると、通所者は借家で共同生活しながら畑仕事とリハビリに励む。十一月の早朝、山の斜面のミカン畑で作業が始まった。この日はサルやシカよけの柵の補強作業が。暮れまで続いた。

「平山農園」から依頼が入ると、通所者は借家で共同生活しながら畑仕事とリハビリに励む。十一月の早朝、山の斜面のミカン畑で作業が始まった。この日はサルやシカよけの柵の補強作業が。暮れまで続いた。

「平山農園」から依頼が入ると、通所者は借家で共同生活しながら畑仕事とリハビリに励む。十一月の早朝、山の斜面のミカン畑で作業が始まった。この日はサルやシカよけの柵の補強作業が。暮れまで続いた。

収入得て自活「希望持てた」

親の紹介でダルクに通い薬物は断ったが、困ったのが職探しだった。薬物経験者への偏見や、人なじめない性格もあって仕事が長続きしなかった。そんな時に農園の仕事に出合った。半月近くを農園で働き、多い時は七万円の月収がある。最近、生活保護も断った。体のあちこちが痛むが「自然相手はストレスが少ない。希望を持って生きるのは初めて」と手応えを感じている。

さくらさん以外にも七人が農作業やカキ養殖業を経験。三重ダルクは現在、林業の業者にも仕事の請負を交渉中だ。市川岳仁代表（四）は「社会の一員として必要とされること」が回復に欠かせない。担い手不足の一次産業なら仕事をもらいやすく、自然相手は心理面にも良い」と話している。